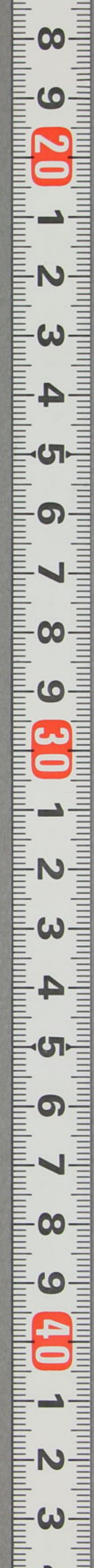


三つ子の母の赤たて巻

5
4462
2



門へ 5
號 4462
卷 2

あつは

師の風雅万代不易者一時乃変化あり
其の二にあり

にあつは易と云ふは新古と云ふは変化流りふもかまは
殊よりよきと云ふは海之代この代人乃前と見るは代々其は
化あり又新古もわらはる今見る所なり又一にわらはる
あつはなるがまゝ一先易と云ふは下りまゝの易なり化
するものも自然の理なり変化ありつゝされハ風ありたり
次は又押移りしと云ふは一様の流れに口變付とわらはる斗
てその識と云ふはるあると云ふは心と云ふはつゝするもの
識乃變

赤

昭和九年
十月一日
購求

化を知ると申さるなり唯人はやうして好のこせむ
このちその比は只とまかしく一歩自然をせしむる
いふも変り化はるるも謀の変化は皆師乃能諧之如皇
も古人の証とあるむふふれ四時乃押秘かくおあつた
あるはかくれと一とまに源末初の統り門人は後乃風
雅とよみ師の白此そのいして百変百化を志す後とも
世の流まをひのこまをいふまをそのとらう中にいまこ
どもをいふとこはあのおくのたりやれは能諧いすに
然とわいとも云もたれ一のまをいふとくあつたこと
至て俗をいふと一とのまをいふは風雅の謀をせしむ

と至て今あるは能諧はゆると一とまをいふ風雅はつもの
ハ思ふ心乃もあつたりて句安寧とものなりはえおあつた
あつて子細な一のなりいふとらうかきされハ外に詞と
まきいふはあまは謀と勤る心乃俗之謀と勤るとあま風
雅は古人の心を探るとくハ師の心よく知へ一とまをい
ふは能諧はたるとに謀の道が一とそれと知るハ師の謀を
の治を造ひよく又知るハ衆心の能押秘し受りて自
得するなりとあつたりと議と勤るといふと一師のおの
は我らといふなりとあつたりて私まは師れなりとあつたり
く世の門とけとらうなりとあつたりて私のたとけま一あま

入るも肝のきるよりある能書ふもさるる肝のしく
きふりいつひはまき席に坐て之聲と歌とるは發しん
さふり迷は言出くまよて迷ふ念おし文聲引おる
せと取及故ことれひしく示さるる詞も何り或時ハ大本傳
をこし一強本に切込きた西風印ふし一梨子くおつま
三十大白皆やり白おしくいろくませせうれ侍るも皆功志乃
私意とさひやわくせんとの詞之陣のふとよく執り
つこは勤てまにのそとて業しと語まきりなうれ業する
とわしおて出る節うある一うは者勤てふの位とけく
まきこの勤くやいふや白と形る一う氣とこ流しとま

く精せは別精るる細くたうりてハ貫之ういと節の通ふ。
まのゆらく精してハ侍者大原のこまゆくの丈夫ふふ
まの有りき一皆いきて精するに歌いも節する一
新ハ能譜のまこる能ハ花たうて木立まのぬりきる
く流せらるる亡師まは影まやせまも新まの白ひえその指
と見えぬる人を悦て我も人もせめくれ一正せめて流り
せしまハ新まか一新まハ世にせむるう由ハ一歩月然
ます能地より歌えく名月ま替れ雪や回れくまらと云
ハ海不易らり花くこえて綿留と阿ま一ハ新まこ
肝の白乳坤のまハ風粧のまここらり新まらりのま不

と歌よはちあんとまらとをきてのうたうし

かよむんたうやふんのおやめを

は白もほくき次たりや又月のあや先草よふまの

をきてのうたうし

花のうしとみほひるなきとも

いしし梅満寺のまるとはありて新派と

浸せる夕まといと涼しくれハ

夕もれやさらくに涼む浪の舞

は白ハ古あをあましてまふをえとる他あふし

かよむんたうやふんのおやめを

此のうたにせざるゆもあられも白雲横とふ奇文を味合ふ

つしハ声や横こふとも一歩の紅は横たふやも白化五人も

判さきて後江の字抜く水の上とくろあけて白れ白ひも

一見も定る水出接天白雲横江の横白眼なるし

たのむはなはれ月をた山のかげにいとくく物の

跡もたたくしてあぬ三あまたひらり

たのむはなはれ月をた山のかげにいとくく物の

跡もたたくしてあぬ三あまたひらり

るに麻くは夏月を茶此煙

は白吉人の詞とまあなして風情を照はる初る上眼とん

此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、

此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、

此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、

此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、

此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、
此夕山中に子ともと遊びてとあるは、

二日おもぬらりハヤリハ花の集

遷化の時の方くその人を梅ははしてなまの年の花おせと
のふと物よりつてあふらとめきそのまれば又位をな

稲妻とよよなとやこれ紙燭那

この句師のいよく門人この名はあや一きふとねるまよ
ひてきぬ句とありその何や一ねをいりんとねおかくれ
て一万人きひ一をふふとめはへ一
旅人このつ名呼まは人初一れ
は句を師去江は旅出の日はたこのいさま一ねを句乃
ぬりよふりも一てよふれん初一れと一と一と一と一と一と
まをを歌ま亦後のと一とあまよ一とと一と一と一と一と一と

門人よ遠くれ一風情あつちのこのねる一と一と他
よ物一旅のふのむとを味屋一

何よけ師走の市よりけ馬

は句師のいよく又文字れつきこまよ有とふま
わよよま正月ハ梅のむさうり

この句ハやとま月の初夏又正月に梅咲ることをいふと
ふとや卯月形まほとま月の声ハと歌ふんとあま一と一と一と

梅鯛の齒くきもき一奥れ柵

は句師のいよく心きんたと句よなつちとの自賛また一と一と
後念を生て出らん初鱧とつとととらのやのね人の志ぬ

西之又いづく様のと白く蒙の月とふハま角と培朝の迄
くきハ家老の下を真の棚とた言ふるも自白とら下

喜立や新年始り米又拜

い句原の田似合しやとはし先又文字ありは惜るく
とらうと後ハ妻立やと並りて短冊も飾り侍るく

とや成世分監するを又長う書

たは判のいさくらハ書見よころふところまで

お加しの身ハ竹舟に似るるふ

山語来て何やう床しきとれきよ

家ハとら杖よ公發のたう集り

灌佛や鼓多合る珠数乃音

此那分る先ハ聖分してと二字餘りの音見らうめ
いさおくと又文字を本枯初ハね句あわらしめと解て
まうをみま葉ハ初ハ何となく何やう床しとて家ハ
一家これとて灌仏も初ハ初とん命やとて一後お
うられ侍らうけ初様あまし皆原の心のうと記之味ふ
寝の床心を入るやまうくま
床の白自筆にま初ハ床よ来て軒よ入るやまうく
とらふ句ありなりとられ侍らう

草斗て者るはや着のそ肌

は句始ハ初と初とやとるはやとる及出るこ

風を也 志と語と極一 庭の秋

此句ある此庭とるの句は風吹とも一ひき風を也
ともよりなく吐いていろと色とつ字もさるやうな
色とつ字に先ま一と

らん 山やくにうらうらあふれ

よ句と一先ハ恰お初とみ文字を再吐一後えんや
にあり侍ると

鞍つ原よ小坊ま乃や大振引

は句原のよと此や大振引と小坊ま此よく同じま

句佳ありと初季

六月や峯よ去とく阿り山

この句は梅舎の句と去と嵐山とよ句佳ありと
処とつり

川風やうす折若る夕涼と

は句まみのつひ折少ら初て侍ると

雲雀鳴中の拍子や籠子此ま

此句はまのつひ折ける中と籠子折くつ入るうと
といひて甚深なる味をとんといろく一そをを

かくさけも空也の瘦もまの肉

この句原のいづくの味と云とんとと敷日つとを
あつとこちのあつと句と云え侍る

蛇とまきけいおとあし子此家

此の句原のいづくの味と云とんとと敷日つとを
いづくを角つ句と蛇とあつといふ老吟と云

本のもといけも繪とさくか

此の句此時原のいづくの味と云とんとと敷日つとを
こととつとつと

たう算そあつと餅負ふ牛此年

いづくの味と云とんとと敷日つとを
いづくの味と云とんとと敷日つとを

七夕や秋とささるけいめの家

いづくの味と云とんとと敷日つとを
そいづくの味と云とんとと敷日つとを

又六乃かき終入る石の上

あつとつとつと

いづくの味と云とんとと敷日つとを
いづくの味と云とんとと敷日つとを

あつとつとつと

あつとつとつと

いづくの味と云とんとと敷日つとを
いづくの味と云とんとと敷日つとを

いづくの味と云とんとと敷日つとを

や〜くや猿よきやる猿の面

は業且原のいそく人同し処よ止る月一処よいづく
落入るるを悔えいひ控ふるをどねり

牛初屋よ蚊のおひらきさし思

い句蚊の声と〜秋の風と笑下〜く後さりの月兼
三沙異と那とあり

梅の香よの山と日れ出る山詠歌

おまろち〜小形きう上の籠の鴨

は二句ある他去は梅ハ餘を籠の〜ハ沙異と是と二句の
蒸さ〜いんと門人のいハ師むと〜くらわ侍るとこ

ひやくと望と物〜てさ藤哉

是も沙異と木の門人のいハ師写と〜く

悔風の心とも青〜栗のい

ひさの此青とさ〜と〜句よあ〜る〜吹もさ〜と〜
お母を句と〜ふ〜て〜さ〜り〜と〜

我を後よ〜る〜る〜る〜

此句よ〜め〜ハ〜友〜る〜や〜く〜我を後よ〜る〜る〜る〜

全屏よ松のぬらひやあ〜り

は句よ〜光ら山を後す〜く〜冬〜菴り〜後〜さ〜
秋風や桐よ動〜く〜は〜の〜

は句悟うこく秋の終りや昔のやむとてうめ八雲の待
後あつて此秋風と

園寂とつてあふ人の後

は句集ともうらなひをてみ文字して下れみ文字はむま
せつうつきとをたぬるこの句盤舟の後むまは縁の意と

寒形不空のこさや 筆

此句朗明をうやがとあぢありけし免の空を殊乃
其やと中のセあり

一いせよつなつまうくその業哉

は句それ喜文通よまをゆるその後をよこつてはは

原の目を此をよくとひはるう河ありよのたうら捨いと

振懐

此秋ハ河てうららるともよる

此句羅波西ての句といは日給よんふよと免て下れみ
字よすとい拂とさうれい

明月や産よつうたを

は句湖水の名月と名月や免を妙ふ堂の縁と

免とたうは名月や海よむうは七小町にもあふ

名よつうらうきとふよ空る

蘭の香や蝶の舞り

比句ハある茶店の片らに道ままひくたきみあり
 一を老ぬまに新り侍りややんば一宿一宿女料紙持出
 句と新ふそ女のいづく戒ハは家の道女あり一戒今ハあ
 る一れ業となり侍る之先のみや一も老婦とつふお女を妻
 と一其は難波の宗周は処まじりまふとこうけて句を
 新ひ侍るる之例おう一たやまといひやくとまきりり
 此そ侍れいおとてかかの新婦の老人の句よ昔は業
 のおつこの宿ぬのおねとうつめ句をまきりてこの句を
 侍るとのありてりこそを者をとるとにかくいひ侍ると老
 人の例は侍るやとせ捨り侍るともたきれおねとたるとり

秋もくやとつと雨一存の形り
 比句う一笑ハ時をかうちよくとはも時ぬ哉と句作り有
 いうまゆりひゆひ侍る少やいろく句作りして心んくう
 及板の等す侍るま終る月の形と自筆の拙もおしきうし侍る
 比句は白下けさういろく並わへ侍りて風と初さう
 中中星は初の字れ位あり一とく光る
 此句は風のととく光あり涼一きとつめは侍る雨
 又く匠とハ那一うこれ侍る

人あやせ道へる秋のうら

此句のうらはさやめ人あやせ道のうら

は二句いつれうと人あやせのうらにけり後人あやせのうら
は元り所恩とよ影をつもてせり

清澁や流はちりひも

此句先ハ大井川流はちりひの月のうらとてそのうらも
ての白葉れちるにまぢりうとてせりうらにけり

板の木に藪あくたう

此句のうら、少づらや、きつめりけりにせりうらとてそのうらも
さやせり藪にけりうらとてせりうらとてそのうらも

旅は病て夏ハ枯野とけり

此句病中のけりて句れ終り之程けりけり夏とてそのうら
さやせりけりやと人あやせのうらにけり
花はま角かけりけりけりけりけりけり
と河を渡りけりけりけりけりけり

朝とさ成語書はけり

此句とさ成語一原の詞も名もけり難の句にもあり
きつめりけりけりけりけりけりけり
さやせりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけり

示

門人の句に元日や家内の礼ハ星月秋のよきた門
松は星月秋と斗はまる句の味は一とく

日松風は新派と燈屋山語哉とつは句を山語を夜をに
まは一とつりよの秋の道乃度りに集ちまとには出まし時を
ら一免の山語をく一とく

日花雪の雲はまとくやいのちりとよ句を人のとるこのを
まか一とくまゆる句はお一休れハ句お一かははくと二三
隙の白いれちりれ句に一てある一とくまのみを休と
やらが一とくまをと宜とはけれのみハあるみをお一れち
らも小男麻のつもちる初屋家のつ一く君たまくはまとま

もその終とまとけれもあられるまといひあらい一とま
となりつ

同類ハかりくまん玉の妻とら句をまられハ玉の字を別
ありかくはも無念なるりとて法句のひ歌一句とつく
河ぬ一やきれぬり時ぬよ並と一とら句をありをハ初と理
屋之な一と魚一とま後法は月といいと云ハ宜とく
河村ならが松旅客と並の端みとんとら句あり初の河
とつり松とと斗はま一とく

日学よ備足らぬらおらまりとら句あり下のみ文字師乃
手解よくらひ知らるハとこ口ツ又美のそ語りぬまえんとら

あはくしてあはせりおを分う那

そ移れかーらをあう栗の穂

あは羽もつくろりぬおーく

一頃風の木の葉をりまふ

は揚二ハお及付一件の句に吾等の句ハ世分治しくあはれ
おさゆりく後をつあ句を全部たる体と揚と以木のそれ句
ハや句のあをよ句に揚又一何くー落葉をれー油三て
後乃書れたーさと見込くあ句のあのみをよ句とよ句とのに
くーれ句に

き菊の隣もありやつけ大板

外のことあさー新さ小窓乃 煉

は揚何一家のよをよ付る之内とかの揚子之煉の字有る

あさーて見えさやうの田植

あわしたあ人ふ彼のよ月雨

は揚名所をいふ付る句にふ彼を揚る風流を句と揚る

秋の音は先くはは屋の那

萩そー萩よー萩又萩よー

は揚あ句はふ乃末をよ付る句をり

葉種千造の端や夕涼

常あひあひさいのそ那

は獨あふれ位をえあめてもふかく付る句はあ裁
そあうりの似念あおと寄

あおさう旅寐は牧屋と忘せり

古人うやうれ秋の末かり

は獨風のさひし秋夜古うりの夜ある一とふ句
と付らハその旅寐ふ言く思てふといく付る句と

おくそこもねくて冬木の梢か

小喜よ首の勤くこのむ

この獨あてうねる日れまの生たりわりの貌よ案
悦のいろをえきくるまてまを付る句と

市中ハおの白ひや夜の月



あつーくと門くれと

は獨白ひや夜の月とまをえ込く極異を那て
え込の心を照さ

い語くの意もまうりその子

ううれて蝶乃目をさふ一ぬる

此揚ちほさうハ一とふふ乃白にちねりし蝶のち
まねち揚ちひ入るりしを付る句と

おくや夏戸はさるる秋の声

あふれよあふれぬねむり

この秘教句の位を思ひ志めて自よ詠へくるもあはれおはす

緑の草履乃ちお志あるま

石畑におそね小館とあり分て

は句氣を付とて一句麻友の巻の付へうも志めると

ひふまの

夕虫おまゝく美君ひらる

根の本よせと字はハ外に藤人

一句付くもに古代あしてま自へ美系ふとの付あり

井の葉よ涇渾く面白や

改らつちあし門へのまの付

これ一句強者の付へお句はうきさいにをふとあはれ
まの秋とけり

龜山やあじの山やこのや

る上よ碎くかくえりれつ

お句のやの字書きともは碎てそはる新と自
歌は一句風狂人の付へ

野松よ燈の啼くまゝ

歩けあおもわかれ人と啼して

お句はうきさゝるまといひとねしるひまゝ
あひ入るち急くわかれ人のゆりふかくはる句は

青天の青の月の影はけ

湖水の秋は良はる月影

お白れ初又乃答より成起し湖水の秋は良はる

おと清く冷しく大減る風景を寄

僧や多く寺り歸り

猿川の猿と世を經る秋の月

木の二句およまざる格と人の五拍と一句とて世の

おろき海を付とほ

こもくしと草鞋を伝る舟夜に

香をゆいしは起るもつ秋

こもくしとつ詞は秋の文と淋しは拍を足込人麻

を秋をいさるものとあひなて妹ふと麻笑しそ起

るきは別人と立ち足込心を二句おるに歌ま

秋は若たしくとくも持のう

竹の影疎しき申待り

お白れ並の字の気味よせも記麻而衛一り計位居

とのえ斤付て掃清めする所と足込よひしき申待

の影を背するく弥の字ひらりわり

ほよらけりる歌あまうん

又六の目を歌まてくれり

あふのやとくけて其白れ坊ひは移りて付る白く

舟に身を引起されて恥しき

髪あふくはる 羅のの

あふれ花神の移りをいふ付る之句は夏女の祈り

牡丹ありく後こり

耳ごとく妹は告ぐる部公

いとく付る白く

あはれ風れ舟をこらる浪の音

厂けりまや白子あ松

あふの心の移りをいふて気色よ歌し付る白く

鮎乃の春にけり

弟本いまうぬは生て歳もあり

あふに言外は儂る白分のふす及くまうぬ小菘

弟本とあれは宿を付る白く

能く乃七尾乃冬八位く

真の界あつるをけ老を見て

あふれ下は位を足込けとあるまきとさひおして人

の祈を付る白く

中へに上間をまのれは春は

あふ名を里にけりあり

この台あり新あり

入込は流石の涌湯の夕まれ

中にもせん此きり山ゆ

あふ小はまりて付る白くそ中れを月まで
いひる白あり

人妻の仲よ何を呼中ん

嵐も舟をきりあつ

この白く先は流石の嵐舟きりるとせいの出
られ侍るよあ白のあふとあ字を合て付るか
白く曉の字骨おま主人のいよく流石の嵐新

に侍るも舟きりるといひて下の七ちはおれ
くとり原まで置とつ

板の本あり此豆かを吹

きりき炉に任持をひとり扱む

い白くあは任持さ動くと取て後淋の字陰

相の本きり月さゆ

門志免てたきりて痛る面白

この事先師のいよくまを依り門志免ての二白り後を
まきりて試る方と門人再とあは皆位するのひそくはあ
しあさ^ダ芽生といふ白くようれは老師のあふあ非き

一、ぬかちりぬかちり時五よきよれや
 火をとりきよきよのうらひす
 一年は仕りきよきよおさきりて
 けしんららちのあてれ句に十余句斗たりかてわ
 是に交せりれいとこ

希人といふ是ららん吾れ並
 酒の戸たたく鞭のうれ梅

朝うかり先より母衣を引つて

此句之八門人杜園う句にけしんせんと人てきぬとひ
 出侍るし原のいそくけしんとの附くとあまこあまうら
 鞭おてほなをたたくといふものハ風狂の侍人たたく
 さもあまうら一枯梅の風流よあひ入るハ武者のおよは
 分とあるうらとこ

歩りあまの杖つき坂を登るが

角材とかがぬ牛もあるもの

此句を門人土芳う句に先師は句を風を侍り奉
 那し皆揃しとあまうらとあまのくさぬくつけてん
 侍れもあまのうらとあまのうらをんを侍れはよ
 侍りてその侍りて侍り侍り原のふまかへ

